

「気づき」という布を織る旅

神奈川県立保健福祉大学 看護学科 4年生 大澤真美

関野吉晴先生へ

かぶりつきで講義を聞いて、「放課後」も目の前の席に座らせていただき、とっても贅沢な時間でした。あっという間に時間が経ってしまいました。

ぼくの旅は、「布を織るようなもの」という話が、心に響きました。

縦糸が決めた道だとすると、横糸が寄り道で、その2つの道の行き来で布が織られる。そして、その布は、本やテレビ番組のような成果物ではなくて、「自分のものの見方の変化」「気づき」である、と。70歳を目前にしても、まだ沢山の「気づき」があるとおっしゃいましたね。先生がキラキラした目で語る講義からは、体験からの発見で、世界が違ったものに見えてくる過程の興奮が、伝わってくるようでした。そうして、人間とは何か？社会とは何か？を問い続け、発見し続ける旅を続けて来られたように感じます。

帰る道すがら、この話が、何故か何度も繰り返し思い出されました。

そして、ある瞬間にハッとしました。私が興奮して、楽しくて、嬉しくなる瞬間、ぱあっと世界が開け、自分が外に広がって行くような感覚を覚えるのは、やはり自分の価値観や常識が打ち破られる時だったと思い当たったのです。

私は、アマゾンやアフリカを巡る旅はしないかも知れませんが、でも、「『気づき』に至る過程を追い求めながら、自分の『布』を織っていけばいいんだ」。そう思うと、1年後に卒業を控えて、進路に迷う今の気持ちが、とても明るくなりました。自分自身の感覚を信じて旅を続ければ、ふと振り返ったときに、オリジナルな布が織れているということなのかもしれません。

先生が、放課後におっしゃった「旅に壮大も、ちまちましたものもなく、人はそれぞれの旅をしている」という言葉を反芻し、私にしかできない旅をして行きたいと思います。

ありがとうございました。

追伸：先生は、医者でよかったことは、「写真家だったら相手は逃げるけど、医者なら自分から来てくれて、しかも身体的な側面を見ることができること」とおっしゃっていましたね。看護師にも、相手の体に触れることができる、悩みや辛さを打ち明けてもらえる特権があります。看護師という窓口を通して、「人とは何か？」を探求して行きたいと思いました。